



大震災から10年・交流の記憶⑧

10年間で培った避難者支援のノウハウ 新たなページを増やし生かしていく

震災当時、広野町公民館内で勤務していた高梨さんは避難した町民を取りまとめる立場にあった。水の確保や名簿作成、電気の復旧などに走り回り、情報が集約できるよう町民を同じ避難所に集めた。「この経験が自身のターニングポイント。震災直後に培われたノウハウが後の活動に役立った」。その後、町民のいわき市への避難に伴い、自身も市内の仮設住宅の運営に携わるようになり、ボランティアの受入れやイベント開催、自治会づくり等に奔走する。

2013年に入職したNPO法人みんなぐくでは、避難者支援における「行政との連携の必要性」を感じ、双葉郡の各町村を訪問し情報収集をさせてほしいと願い出た。「お互いそれぞれの地に固執しているように映った。自分は広野町出身で、双葉郡の人の気持ちも分かる。いわきとの懸け橋になりたいと思った」と話す。支援者の押し付けにならないよう、常に住

民に寄り添いながら様々な支援に携わった。地域との信頼関係を築くため、顔出しを大切にししていると、仮設住宅の人や支援を希望する地元の人から気軽に声を掛けてもらえることが増えた。復興公営住宅への入居開始時は入居者同士や受入先の地域との関係づくりをサポートし、それが自治会の立ち上げや交流会の開催などにも結びついた。

今はいわきの他団体とも連携し、孤独死防止など新たな支援の形を模索している。「コロナ禍の今、人との接触をせずにどう交流を進めるか。どこまでやるべきか分からないが、試行錯誤しながら取組むことで次に進むことになる。避難由来の課題に特化していた支援の取り組みを、「日常生活の課題改善」の領域まで一歩踏み込み積極的に取り組んでいきたい。」

多くの人に助けられた10年間で、「自分にはこの先何ができるか」をいつも考えている。「同じ地域内ばかりでなく多くの地域の人々と話し発想を広げることで、何かしら形になるものが作れるはず」。それがまた新たなノウハウになり、双葉といわきの懸け橋として活躍できることに繋がると感じている。



NPO法人みんなぐく
高梨 幸司さん

広野町出身。いわき明星大学(現:医療創生大学)を卒業後、あぶくま信用金庫に勤務。2010年、広野みかんくらぶ創設に経理として携わる。2013年、NPO法人みんなぐくに入職。行政との連携の大切さを最優先に考え、多くの取り組みを行っている。

今回は2021年2月27日(土)掲載予定です。